ゾウの肉に集まる人びと

林　耕次（はやしこうじ）
総合研究大学院大学
統計数理研究所外来研究員

写真提供：旭川市旭山動物園

マルミミゾウ
（学名：*Loxodonta cyclotis*）

別名シンリンゾウとも呼ばれ、アフリカ中央部から西部の森林地帯に生息する。個体数は、1987年時点で推定375,000頭という報告がある。アフリカゾウのなかでもサバラ以南に生息するサバンナ性の個体群（学名：*Loxodonta africana*）に比べて小型で耳が丸く、象牙は湾曲せず直線的に下に伸びているのが特徴。体型の違うアフリカゾウの亜種とされていたが、遺伝子がかなり異なることから、近年、両者は別の種としてとらえるべきであるとの見解がある。

緊張みなぎる狩猟

集落から一〇キロメートルほど離れた森の奥では、灌木や草が倒され、明らかに巨大な動物が通過したあとの獣道が続いていた。地面には、直径二〇センチメートルほどの丸い足跡がいくつもしるされている。周囲がかすかに獣くさいことに加え、足跡の様子や水たまりの濁った状態から、マルミミゾウがその先にいることがわかる。追跡をおこなっていた男たちの顔には緊張がみなぎり、二人の狩猟者は手にした銃に弾を込めはじめた。

私は、アフリカの熱帯雨林に位置するカメルーン南東部で、定住生活を送りながら季節に応じて狩猟採集をおこなうバカ・ピグミーの人びとと、乾季のキャンプ生活を共にしていた。彼らは食用のためにゾウを狩る。

狩猟者は上着を脱いで、それぞれの銃筒部分に一メートル弱の槍を差し込むと追跡を再開した。やがて、パイと呼ばれる見晴らしのよい湿地に出ると、前方一〇〇メートルほど先に数頭のゾウの群れを確認した。私は背に促されて、近くの樹上に待避する。狩猟者は、ゾウに気付かれないよう五～一〇メートルまで接近するために、風下から草木に身を潜めつつ、細心の注意を払いながら近づいていった。やがて、銃声と共にゾウの雄叫びが響いたが、このときの狩猟は失敗に終わった。発砲の勢いで槍を飛ばしたものの、跳ね返されてあえなく逃げられてしまったのだ。

あますことなく分配

別の機会を得て、私はゾウを仕留めたあとのキャンプに同行した。ゾウ狩り成功の知らせを受けた人びとは、興奮混じりで移動の準備を始めた。翌朝、ゾウを倒した現場に到着すると、すでに狩猟に携わっていた男が数名がかりで解体をおこなっていた。分厚い皮を剥いだり太い骨を砕くのには斧が使われ、肉の切り出しには鋭利な槍の刃先を取り外して、ナイフ代わりに扱っている。

森のキャンプはおもに血縁者同士で構成される

「トゥーマ」と呼ばれるゾウ狩猟の熟練者は、ゾウに逃げられたあと、悔しそうに状況を説明してくれた

さらに足跡を追って湿地を進む

切り出した肉は、灌木を組んだ専用の乾燥棚に運ばれて下から燻される。この肉を手製の臼と杵で丹念についた後に、ゾウの脂肪で炒めて塩とトウガラシで味を付けた「モサブ」は、まさにゾウ肉ならではの調理法といえよう。生の肉から調理したものに比べて、こちらは肉の繊維がじゅうぶんにほぐされたこともあり柔らかい。また、燻されたことで香ばしくなり食べやすい。

燻すことで保存性を高めた肉の一部は集落に持ち帰り、それぞれの集落以外の人びとにも分配される。バカの人びとにとってマルミミゾウの狩猟は、多量の肉が一度に手に入り、広範囲に肉の分配が可能という点でも重要視されているのである。

一九七〇年代末から八〇年代にかけては、アフリカゾウにとって受難の時代であった。熱帯雨林のマルミミゾウも、象牙を目的とした大規模な密猟によってその数は半減したといわれている。カメルーンを含むアフリカ各国では、ゾウ狩猟に対する規制が厳しくなり、密猟や象牙取引の取り締まりが強化された。密猟者のなかには禁固刑を命ぜられるものもいるという。慣習的な要素を併せ持つゾウ狩猟は依然としておこなわれているが、当事者であるバカの人びとにとっては、従来の狩猟を継続することが困難になりつつある。

湿地を歩く数頭のマルミミゾウ

ゾウが倒された場所には人が集い、大量の肉が数日がかりで燻される

バカのゾウ狩猟者は慣習にしたがい、自らが仕留めたゾウの肉は食べない

じゅうぶんに燻した肉は、キャンプに集まった世帯ごとで分配する

解体されているのはメスのマルミミゾウ

乾燥したゾウの耳。加工して携帯用の小箱をつくることもある